

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320142

研究課題名(和文)最新の考古調査および礼制研究の成果を用いた中国古代都城史の新研究

研究課題名(英文)New Research on Ancient Chinese Castle-Style Cities Based on Archaeological Surveys and Etiquette Studies

研究代表者

佐川 英治 (Sagawa, Eiji)

東京大学・人文社会系研究科・准教授

研究者番号：00343286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,700,000円、(間接経費) 4,110,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では新しい考古学の発見をもとにして漢代から唐代にかけての中国古代都城の設計を研究し、日本をはじめとする東アジア世界に大きな影響を及ぼした唐の長安城の設計がいかんして生まれ、その設計にいかなる意味があったかを明らかにした。そしてその成果を論文や講演を通じて国内外で広く発表するとともに、これまで日本人の研究者が足を踏み入れたことのなかった中国内地の遺跡を調査し、その成果を『大青山一帯の北魏城址の研究』と題する報告書にまとめた。

研究成果の概要(英文)：This research examines ancient Chinese castle-style cities from the Han Dynasty to the Tang Dynasty based on new discoveries in archaeology. It clarifies how the design of a castle city - the Tang Chang'an Castle which later influenced architecture in Japan and greater East Asia - came about, and also describes the significance of that design. The results of this research have been presented in reports and lectures in Japan and abroad. In addition to the material discussed in that presentation, the research has also surveyed ruins on the Chinese mainland where Japanese researchers have not explored before. Those results were outlined in a report titled "A Study of Northern Wei Castle Ruins in the Daqing Mountain Range."

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：中国古代史 都城

### 1. 研究開始当初の背景

この20年余り、中国は驚くべき経済発展を遂げてきた。中国古代都城史の研究はこの影響を受けて最も発展した分野の一つである。背景には、開発にともなう遺跡や遺物の発見がある。これにともない保護や保存、研究への感心が高まり、遺跡に関するより精密な調査、測量、発掘がおこなわれた。また各地で博物館が新設・拡張され、資料の整理や再刊がおこなわれ、多くの資料を目にすることができるようになった。西安の大明宮博物館、安陽の鄴城博物館のように都城を主題とした博物館も開設されている。さらにgoogle earthなどによって城壁、河川、丘陵、墓葬など都城にかかわる地理情報が極めて簡単に得られるようになった。これらによって中国古代都城史研究に新たな可能性が開かれている。

### 2. 研究の目的

中国の都城には皇帝の都、天下の中心としての独特の設計がある。都城の設計は強い理念性を帯びており、この理念性が中国の都城の独自性を生みだしている。漢から唐への都城プランの変化には、この理念の変化が反映されている。一方で、漢代から唐代へいたる間に中国の都城は「王城」から「都市」へと変貌した。漢の長安城と唐の長安城の都市プランの違いは、こうした都城の変貌に対するものでもあった。したがって、唐の長安城の都市プランがいかにして生まれたかを知るには、皇帝理念の変化と都城の都市化の二つの側面から発展の軌跡を分析していかねばならない。本研究ではこの両面から中国古代の都城史を研究し、都城史を再構築することで、唐の長安城のプランの成立を歴史的に解明することを目的とした。

### 3. 研究の方法

都城は皇帝にとって一つの巨大な儀礼装置である。そしてこの装置を動かすプログラムが礼制である。ゆえに都城と礼制は密接な関係をもっている。本研究ではまず今日の考古学的な成果や新しい地図、航空写真、フィールド・ワークを用いながら空間としての都城の復元を目指した。もちろん、これらの材料が直ちに都城の全面的な復元を可能にするわけではなく、精密な文献的な考証も必要となる。本研究では新たな材料と文献的な考証によって漢唐間の都城空間の復元を目指した。次に都城を舞台とした皇帝儀礼の変遷を検討した。とりわけ皇帝にとって最も重要な祭祀である宗廟と郊祀(南郊)についてその性格と位置の変遷を検討し、都城プランとのかかわりを検証した。

### 4. 研究成果

(1) 研究代表者の佐川英治は、漢唐間の都城プランと礼制との関係について国内外で精力的に論文発表や学会をおこなった。本研

究を通じて明らかにした主な事実は下記の7点である。

春秋戦国期における礼制上の都城プランは、宗廟を設計の中心となす「内発外向」の都城プランであった。この都城プランは、始皇帝の新都構想や前漢の長安城の設計にも影響を与えていた。

しかるに、董仲舒以降、宗廟よりも郊祀を重んずべきとする儒教の一派が現れてくる。これは皇帝の権威の源泉を祖先から天へと移すことにより、皇帝を天命に従わせ、徳治に努めさせようとする試みであった。前漢末期に皇帝の権威が低下してくると、皇帝の側もこれを受け入れ権威を回復しようとする動きが現れるようになり、成帝の時代に始めて長安に南郊が建設された。しかし、依然として宗廟の権威も重視され、郊祀は宗廟の権威を損なうという議論のもとに三十年にわたって置廢を繰り返した。前漢末王莽が『孝経』を根拠に、郊祀に高祖を配祀し、天の祭祀を孝の祭祀に読み替えることでようやく郊祀は安定する。

ところが、王莽の易姓革命を経て皇帝に即位した光武帝は、もはや宗廟を介せず、直接郊祀によって即位した。後漢でも高祖は配祀されたが、その影は薄いものとなり、天の祭祀としての郊祀が重視された。前漢長安城では長陵と城内の高祖廟を結ぶ「宗廟道」が最も神聖な道とされていたが、後漢洛陽では皇帝が郊祀に向かう平城門が都城の正門となり、この門と南郊を結ぶ「南北郊路」が神聖な道となった。このことは南北を軸とする都城プランを決定的に方向づけたが、後漢の南郊はなお都城を取り巻く五兆(東西南北に中郊の五つ)の一つに過ぎず、南郊も都城から七里の「丙巳」(南南東)の地に置かれ、正南にはなかった。

後漢の末に儒学者鄭玄は、王朝の始祖と結びついた南郊とは別に、より普遍的な天を祀る円丘の存在を経学的に論じた。後漢の禅譲を受け易姓革命を果たした曹魏では、明帝の信頼を得た高堂隆が、鄭玄説にもとづいて洛陽の遙か南の委粟山に新たに円丘を設置し、この円丘と円丘に対置される北の方沢を起点とする都城プランを礼制上の理想の都城プランとした。高堂隆の都城プランは理想に止まり実現することはなかったが、ここに従来の王城を遙かに超える空間を包摂し、南北の円丘 方沢を起点とする「外発内向」の都城プランが誕生した。

南北朝時代には「王城」の外側に住民が密集する都市空間が出現し、七里の南郊はしだいにその範囲に飲み込まれるようになっていった。そこで五世紀中頃の劉宋の孝武帝は、建康の宮殿の正南の牛首山に南郊を移し、宮殿と南郊の間に直線道路を築いて新たな都市の中軸線に据えようとした。しかし、南朝では漢の伝統が重んじられたため、孝武帝の死後、南郊は再び七里の「丙巳」の地にもどされた。以後建康では必ずしも都市の発展は

南側に規定されず、環状型の都市の発展が見られた。

これに対して、もともと北魏は遊牧世界の祭祀を受け継ぐ西郊の祭天を重視していたが、孝文帝は漢化政策の象徴として南郊を重視するようになった。五世紀の末に平城から遷都した北魏では、曹魏の南郊と円丘の分祀を受け継ぎ、円丘を宮殿の正南に於いてその間に直線道路を築き、これを中軸線として左右対称に東西二十里の外郭城を築いた。このように宮殿と円丘を対置させ、その間に結ばれる御道から左右対称に城郭を築く方法は、隋の太興城・唐の長安城へと受け継がれ、東アジアの古典的な都城プランとなった。かくして「王城」から「都市」への変貌と皇帝権威の「祖」から「天」への移行はパラレルに進行することによって唐の長安城の都市プランを誕生させたのである。

今日中国でも日本でも曹魏の太極殿は漢の北宮にあることが定説となっているが、この定説に批判的な検討を加え、なお漢の南宮にある可能性も否定できないことを論じた。

なお、については、向井佑介「曹魏洛陽の宮城をめぐる近年の議論」(『史林』95巻1号、2012年)、田中一輝「魏晉洛陽城研究序説」『立命館史学』34(2013年)の批判を受けたが、後者は一부분本研究の主張を認めている。また、の北魏洛陽城の復元プランについては、角山典幸「北魏洛陽城の平面プランと住民の居住状況について」(『人文研究紀要(中央大学人文科学研究所)』72、2011年)で検証を受け、現時点での合理性が認められている。以上の研究については、一書にまとめて刊行するつもりで、現在その準備を進めている。

この他、各分担者はそれぞれの関心に従って学会報告や論文で成果を発表した。

(2)大青山一体の北魏城址について調査をおこない、外部の専門家の協力も得てシンポジウムを開催し、その成果を報告書にまとめた。

佐川英治編『大青山一帯の北魏城址の研究』(中間成果報告書、2013年6月、216頁)

佐川英治「北魏六鎮史の研究」

松下憲一「大青山南部北魏城址遺跡」

塩沢裕仁「大青山北麓の六鎮関連遺跡」

黄曉芬(東亜大学教授)「秦漢帝国北方辺境の歴史空間 内蒙古自治区陰山・河套地区を中心に」

蘇哲(金城大学教授)「墳墓の図像資料から見た北魏平城時代の暮らし」

林俊雄(創価大学教授)「遊牧国家における集落と都市 匈奴から柔然まで」

(3)漢魏南北朝時代の都城の復元について基礎的な研究をおこない、その成果を報告書にまとめた。

佐川英治・陳力・小尾孝夫著『漢魏晋南北朝都城復元図の研究』(研究成果報告書、2013

年3月、149頁)

「漢長安城」「漢魏洛陽城」「曹魏、後趙、東魏北齊鄴城」「六朝建康城」「北魏平城」「成都城・許昌城・盛樂城・統万城・北周長安城」

(4)研究代表者は国内外の国際学会での発表や講演活動を通じて積極的な成果の発信をおこなった。その結果、中国で新たに1本の論文が論文集に、2本の論文が学術雑誌に発表される見通しであり、また今年も都城をテーマとするソウルの国際学会や以前に本科研の成果を発表した上海の国際シンポジウムに再び招かれるなど、国際研究交流の基盤を得た。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計19件)

陳力、漢長安城西南郊、阪南論集、査読無、49(1)、2014、掲載予定

佐川英治、論六朝建康在中国古代都城史上的地位、江南地域文化的歴史演進文集、生活・読書・新知三聯書店、査読無、2013、pp.433-452

陳力、前漢首都圏空間の形成 咸陽原地区における漢代集落の分布と水資源の關係に主眼を置いて、阪南論集、査読無、48(2)、2013、pp.111-121

松下憲一、内蒙古白靈淖古城址の現況—北魏六鎮を考える、愛知学院大学文学部紀要、査読無、43、2013、pp.9-18

小尾孝夫、広陵の高崧とその周辺 六朝南人の一様相、静岡大学人文社会科学部人文論集、査読無、63(2)、2013、pp.101-129

戸川貴行、東晋南朝の建康における華林園について、東洋文化研究、査読有、15、2013、pp.33-57

佐川英治(王薇訳)、曹魏明帝太極殿の所在、中国魏晋南北朝史学会第十届年会暨国際学術研究会論文集、山西出版伝媒集団・北岳文芸出版社、査読無、2012、pp.453-465

佐川英治、漢六朝の郊祀と城市規画、中古時代的礼儀・宗教と制度、上海古籍出版社、査読無、2012、pp.194-223

佐川英治、漢代の郊祀と都城の空間、東アジアの王権と宗教、査読無、勉誠出版、2012、pp.40-51

陳力、前漢王朝建立時における劉邦集團の戦闘経過について(上) 劉邦集團内部の政治的派閥の形成を中心に、阪南論集人文/自然科学編、査読無、47(2)、2012、pp.79-93

佐川英治、中国古代の都城の空間、文化交流研究、査読無、24、2011、pp.45-59

佐川英治、漢魏洛陽城研究の現状と課題、洛陽学国際シンポジウム報告論文集 東アジアにおける洛陽の位置、査読無、明治大学大学院文学研究科・明治大学東アジア

石刻文物研究所、2011、pp.115-138  
塩沢裕仁、洛陽と遣隋使小野妹子、日本学  
研究、査読有、5、2011、香港教育出版社、  
pp.65-69  
塩沢裕仁、洛陽における都城遺跡の保護と  
その問題点、中国考古学、査読無、11、2011、  
18p/pp.245-262  
松下憲二、拓跋鮮卑の都城と陵墓 以呼和  
浩特地区为中心、査読無、呼和浩特歴史  
文化学術研討會論文集、2011、pp.65-74  
小尾孝夫、東晋時期晋陵郡域内無実土僑郡  
太守・僑県令与僑民關係考論、中国中古史  
研究、査読有、1、2011、pp.154-173  
戸川貴行、東晋南朝における伝統の創造に  
ついて 楽曲編成を中心としてみた、東  
方学、査読有、122、2011、pp.13-28  
塩沢裕仁、漢魏洛陽城の都市空間、史潮、  
査読有、67、2010、pp.38-54  
小尾孝夫、南朝宋齊時期の国軍体制と僑州  
南徐州、唐代史研究、査読無、13、2010、  
pp.3-32

[学会発表](計16件)

小尾孝夫、永嘉之乱後の江淮土人と地域社  
会 以対広陵的探討为中心、ワークショ  
ップ「皇帝・単于・土人：中古中国与周辺  
世界」、2014.3.8、南京大学(中国)  
佐川英治、北魏六鎮と司馬氏、2013年“六  
朝研究”国際学術研討会、2013.10.19、南  
京曉莊学院(中国)  
小尾孝夫、劉裕の義熙土断 『宋書』『南  
齊書』に散見する「軍郡」の検討から、  
第7回中国中古史青年学者国際会議、  
2013.8.24、中央大学(東京)  
塩沢裕仁、中国歴代帝陵の現状と課題、法  
政大学史学会、2013.6.1、法政大学(東京)  
小尾孝夫、建康「都城圏」社会の形成と流  
民、魏晋南北朝史国際シンポジウム「歴史  
のなかの都城の作用」、2013.9.15、東京大  
学(東京)  
佐川英治、宗廟と禁苑 中国古代都城の神  
聖空間、INTERNATIONAL CONFERENCE  
SACRED SPACE AND SPATIAL SACREDNESS、  
2013.8.16、復旦大学(中国)  
佐川英治、六朝建康の歴史的位置づけにつ  
いて、六朝建康と都城研究シンポジウム、  
2011.12.18、東京大学(東京)  
小尾孝夫、六朝建康の墓域と都市空間、六  
朝建康と都城研究シンポジウム、  
2011.12.18、東京大学(東京)  
戸川貴行、東晋南朝の建康城における華林  
園について、六朝建康と都城研究シンポジ  
ウム、2011.12.18、東京大学(東京)  
塩沢裕仁、洛陽の五大都城遺址とその保護  
研究状況、日本中国考古学会、  
2011.11.27、奈良文化財研究所(奈良)  
塩沢裕仁、洛陽・河南の歴史地理と文物状  
況、洛陽学国際シンポジウム、2011.11.27、  
明治大学(東京)  
塩沢裕仁、洛陽の都城遺址と水環境、中国

水利史研究会研究大会、2011.10.31、大阪  
教育大学(大阪)  
佐川英治、曹魏明帝太極殿の所在、中国魏  
晋南北朝史学会第十周年会暨国際学術研  
討会、2011.10.19、山西大学(中国)  
佐川英治、論六朝建康在中国古代都城史上  
の地位、江南地域文化的歴史演進国際学術  
研討会、2011.9.4、南京国際会議酒店(中  
国)  
佐川英治、漢魏洛陽城研究の現状と課題、  
洛陽学国際シンポジウム、2010.11.27、明  
治大学(東京)  
佐川英治、漢六朝時代の郊祀と城市規画、  
中古時代の礼儀、宗教と制度国際学術検討  
会、2010.11.7、復旦大学(中国)

[図書](計3件)

佐川英治・陳力・小尾孝夫、平成22~25  
年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「最  
新の考古調査および礼制研究の成果を用  
いた中国古代都城史の新研究」(課題番号  
223220142)成果報告書、漢魏南北朝都城  
復元図の研究、2014、149  
佐川英治編、平成22~25年度科学研究費  
補助金(基盤研究(B))「最新の考古調査お  
よび礼制研究の成果を用いた中国古代都  
城史の新研究」(課題番号223220142)中間  
成果報告書、大青山一帯の北魏城址の研究、  
2013、216  
塩沢裕仁、雄山閣、後漢魏晋南北朝都城境  
域研究、2013、374

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等  
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐川 英治(SAGAWA, Eiji)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授  
研究者番号：00343286

(2)研究分担者

陳 力 (CHEN, Li)  
阪南大学・国際コミュニケーション学部・教授  
研究者番号：50299020

松下 憲一 (MATSUSHITA, Kenichi)  
愛知学院大学・文学部・准教授  
研究者番号：60344537

塩沢 裕仁 (SHIOZAWA, Hirohito)  
公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員  
研究者番号：70414076

小尾 孝夫 (OBI, Takao)  
大手前大学・総合文化学部・准教授  
研究者番号：90526675

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

戸川 貴行 (TOGAWA, Takayuki)  
学術振興会特別研究員 (PD)  
研究者番号：60552255